

■ ウインド Etc. (風のエトセトラ)

ジョシュア・ツリーの風景から (その5)

— 個人的カリフォルニア紀行 —

GL Garrad Hassan 内田行宣

ウインドファームは出会いの場

私がカリフォルニアのモハベ砂漠で風車の群れと格闘していた 1990 年当時、一事業者が一箇所に 660 基もの風車を建て、売電ビジネスをしている例は、他に殆どなかった。あったとしても、それはカリフォルニア州内に限られていた。我々のウインドファームには、とにかく沢山の訪問者がやってきた。ウインドファームに投資している米国や日本の投資家・銀行はもちろんだが、その後の世界規模の風力発電ビジネスの発展に貢献したのは、ヨーロッパからの訪問者に与えた影響であろう。チェルノブイリ原子力発電所の事故にヨーロッパ中の人々が脅えたのが 1986 年。その後、多くのヨーロッパの国は、再生可能エネルギー、なかんずく風力を主要電源として導入する政策を打ち出していた。英国からは当時の英国風力エネルギー協会の会長であった電力会社の要人が来た。カリフォルニアへの風車の主要な供給源であるデンマークから来た人には、どこへ行っても遭遇した。アポイントメントなしで現れたドイツ人もいた。

ロゴの効用

当時、風車のナセルには、風車メーカーのロゴが入っているのが当たり前のように通用していた。我々のプロジェクトには、関係者しか正しく覚えていない名称が付けられていたが、外からウインドファームを見た人たちは、一様に、Mitsubishi Wind Farm と呼んでいた。

カリフォルニアの次に、外国企業にも門戸を開いた風力発電市場は英国である。1991 年に非化石燃料 (NFFO) 政策に基づく本格的な再生可能エネルギー導入のために大規模な売電契約の入札が行われたのだが、それに先駆けて日系企業に資本参加を呼び掛けようと、某英国デベロッパーが三菱重工業にアプローチしたのが、トーメンの英国進出の直接の契機である。それは、私個人にとっての英国との出会いでもあった。トーメンは NFFO2 入札で全体の 6 割規模の発電容量におよぶ 13 サイトの売電契約を落札し、英国への進出を決めた。

英国進出

英国ではウインドファームが環境に及ぼす影響への懸念から導入当初の当時から厳しい制限があり、環境影響アセスメントの実施はもとより、風車の色は艶無しのグレーで、ロゴは一切禁止された。これは、いつも灰色をしている空の色に溶け込むようにという配慮であった。

この経験以降、トーメンでは、ロゴに制約のない英国以外の地域では、風車メーカーではなく自社のロゴを注文するようになった。

英国の多くの地域住民の陸上風車に対する否定的な姿勢から、建設許可取得は概して困難であり、1996 年頃から英国風力エネルギー協会のリーダーシップの下、英国は洋上風力市場の開拓に向かったのである。

ベントとキャロライン

米国滞在記の締めくくりは、ベントとキャロラインのことである。建設現場監督のベントはデンマーク人で、米国の会社に雇われていた。現場では言い掛かりやら、苦情やら、とにかく彼と激しくやりとりする場面が多かったが、仕事が終わった後は、よく一緒に食事に出掛けた。週末には LA 郊外の Ventura にあった彼の自宅へも遊びに行った。彼の奥さんのキャロラインは米国人の弁護士で、ベントは「逆」玉の輿を自認していた。アマンダは、ベントと一緒に仕事をしていた 1990 年に、彼とキャロラインの間に生まれた。

彼等とはその後離れ離れになったが、2008 年にドイツのフーサム展示会で再会した。ベントはタワー・ロジスティクスという自分の会社を起業し、風車タワー内の梯子の昇降補助装置を売っていた。キャロラインも一緒だった。風力発電業界の魅力は、仲間と何年にも亘って親しく付き合えることに尽きる。残念なことに、キャロラインはその翌年癌で亡くなった。去年のクリスマスには、成人してすっかり美人になったアマンダの横で相好を崩したベントの写真が送られてきてひと安心した。(完)